

儒教の思想と廣池千九郎

宮下和夫

廣池千九郎（1866-1938）が漢学に造詣を有する人物であったことは、その伝記、研究業績、更には彼の残した格言などから容易にうかがうことのできる事実であろう。彼が通った中津の永添小学校の教育内容は四書（『大学』『論語』『孟子』『中庸』）の素読が中心であったし、師範学校入学を目指して大分で門を叩いたのは、漢学者である小川含章（帆足万里の弟子）が主宰する「麗澤館」という私塾でもあった。三十代に手がけてきた『和漢比較律疏』『大唐六典』『東洋法制史序論』などの法制史研究、更には『支那文典』のような漢文法の研究なども、漢学の素養に裏付けられた業績である。道徳の研究でいえば、主著『道徳科学の論文』には数多くの漢籍が引用されるとともに「最高道徳の実行者」の一人として孔子が詳述されているし、『孝道の科学的研究』は現在でも孝に関する参考文献の中で戦前に流布していた有用な日本語図書として、沢柳政太郎『孝道』や桑原隲蔵の名著『中国の孝道』と並んで紹介されている（加地伸行『孝経』講談社学術文庫）。彼が昭和十年に創設した道徳科学専攻塾（現在の麗澤大学の前身）では、「天爵を修めて人爵之に従う」（『孟子』）や「大学の道は明德を明らかにするに在り」（『大学』）など儒教の古典に由来する格言類が扁額として掲げられ、その伝統は現在にも受け継がれている。本稿では生誕百五十年を迎えた廣池千九郎の儒教観を、彼が提唱した「道徳科学」との関連を踏まえて述べてみたい。

現代における儒教研究のテーマの一つに「儒教は宗教か」という問いがある。そこには儒教という伝統文化が人類社会に価値あるものを貢献できるか、「21世紀儒学への転換」（杜維明「21世紀の儒学」）を見据えた上で何を議論すべきか、という現代的な問題関心がある。従来、日本でも中国でも儒教は宗教に非ずという意見のほうが主流であるが、その一方で加地伸行『儒教とは何か』『沈黙の宗教——儒教』など、儒教に潜在する宗教性に着目したものがロングセラーとなって読み継がれているし、中国や欧米の研究者の間でも以前より儒教の宗教性には注意が向けられてきた（ロッドネイ・L・タイラー「儒教の伝統における宗教的特質」参照）。儒教の宗教性をめぐる近年のこうした議論と交差する視点が、生誕百五十年を迎えた廣池千九郎

の儒教観から窺われるとしたら、それは興味深い事柄だろう。

廣池千九郎が昭和三年に刊行した主著『道徳科学の論文』（以下『論文』と略）に基づいて提唱した「道徳科学（モラロジー）」は、その名の示すとおり「道徳」に主軸を定めたものである。そこには具体的に言えば、「倫理」ではなく「道徳」に、「宗教」ではなく「道徳」に、これからの人類社会の進むべき道程を探るという廣池の含意があった。「倫理」と「道徳」、「宗教」と「道徳」の差異を彼がどこに見定めていたかは、『論文』第一章第七項・第八項などを参照されたいが、その要点的第一は「道徳を倫理的に知ること」（＝倫理学）だけでなく「これを実行すること」（＝道徳）を含めようとする企図（『論文』①62頁）にある。第二に、人類史を通じて宗教の信仰や感化に伴う形で実践・推進されてきた「道徳」の価値や権威を、宗教的ではなく万人が首肯しうるように、「合理的に説明」（同30-31頁）を与えようとする企図がある。この構想をわかりやすく単純化して言うならば、実践を離れやすいが客観的で万人が検証しうる学問的アプローチと、その逆に実践力は高いが信仰的で万人が首肯しえずにいる宗教的アプローチとの両者を昇華した地平に「道徳」という言葉を置いて、実践性と合理性を備えた道徳を追求しようとする試みであった。

実はこうした企図は廣池の儒教観に特徴的に示されたものでもあった。

孔子深く神を信じて、純然たる宗教的安心立命を得ておくことは、すでに第七項に詳に致したごとくであります。しかしながら、孔子は釈迦及びキリストの二人と異なりて、その人類を救済する方法としては、主として学問及び教育により、もって古代聖人の精神を人心に注入し、その総合的結果によりて人類の幸福を増進せんとしたのであります。（中略）信仰よりはむしろ道徳の実行に重きを置き、また人間の理想よりはむしろ人間の実際の生活に重きを置きたれば、孔子の教えを伝えるところの儒教はいわゆる宗教の範疇を脱して、純道徳的に発達したのであります。しかるに、孔子の没後世を経るにしたがって孔子の真の精神は

漸次に忘失せらるるに至り、孔子の感化力は、広く東方アジアに普及したれど、その道徳上の根本義〈神に対する信仰〉が常に没却されがちであったために、その感化の力かえって幾多の弊害を含めるところの宗教に及ばなかったのであります。（中略）儒教においては、孔子の真髓、すなわち孔子の神に対する信仰が正当に認められず、したがってその教えは、人間の精神をその根底より改造して道徳心を向上発展せしむる原動力を欠くに至ったのであります。（『論文』⑥ 206-207 頁）

「孔子の真髓」は「孔子の神に対する信仰」に存すると廣池は言う。同書第十二章には「神に対する孔子の信仰」という一節があるが、要するにそれは孔子の「天」に対する信仰を述べたものである。上記の引用に見えるとおり、それはまた「道徳上の根本義」でもあったが、「学問及び教育」というアプローチをもって「信仰よりはむしろ道徳の実行」を重視したため、「宗教の範疇を脱して、純道徳的に発達した」のが儒教であり、しかもそのアプローチによって後世の儒教においては、孔子の「真の精神」でもある「神に対する信仰」が忘失されて正当に認められなくなり、結果として宗教が保持しているような感化力、言い替えるならば「人間の精神をその根底より改造して道徳心を向上発展せしむる原動力」を欠落させていったと捉えているのである。こうした儒教（孔子）理解は同書の随所に見られる。「神の本体を直ちに理と見るは宋儒の誤りなり。神の力の作用を理すなわち最高道徳の法則と見るべし」（同⑥ 106 頁）とか、「孔・孟の教えには神を信ずるときことこれなく」「これを信ずることを教うるは宗教の仕事なりとの誤解を生ずるに至った」とか、「ついに中国及び日本の知識階級の大部分には、学問と神とは両立せざるものなりとの観念を生じ、これらの知識階級はたいていただ単純なる道徳説にてその身を修め、その道徳にはただ祖先崇拜を含むのみにて、根本の神〈本体〉を含んでおらぬようになった」（同⑦ 256 頁）など、どれも後世の儒教における「神に対する信仰」の喪失と、それによる「道徳」的感化力や原動力の減退が、ひいては「道徳」そのものの不振が、彼の問題意識だった。

では「儒教は宗教か」という問いに対して、廣池千九郎はどう考えていたのであろうか。この問いを考える上で参考になるのは、『論文』第十四章の一節「神を信ずることは必ずしも宗教の専有にあらず」（⑦ 255

頁以下）という主張である。同節において、廣池は「普通の人、特に日本人の中には、神に関する理解はたつて少なく、神を信ずることは必ずしも宗教団体に限るものと考えておるものが多い」ことを挙げて「大なる誤り」と指摘している。第一に神を認めることは動物にはなく「人類に限られたもの」であり、第二に人類史を振り返れば明かなように、政治・法律・道徳・宗教はどれも神（神の心）に淵源（例として「ハムラビ法典」「マヌ法典」「モーゼの律法」、『書経』洪範が挙げられている）しているものであり、それ故「神は必ずしも宗教団体の専有でなく、すべて政治・法律・道徳及び宗教の源」であって、「神を信じて聖人の教訓を守り、道徳的生活をなすことはあえて宗教を俟たずして出来ること」と論じているのである。

このような廣池千九郎の考えを「儒教は宗教か」という問いに当てはめて考えるならば、儒教は宗教ではないが、しかし天に対する信仰をその根本に有する道徳という具合にまとめられる。そしてこのことは先に述べた「道徳科学」の特質——「倫理」でもなく「宗教」でもなく、「道徳」を主軸に据えること——と同様の構造をもっている。ちなみに、我が国の現在の学習指導要領では道徳性を四つの視点に分類整理し、その一つに「自然や崇高なものとのかかわりに関すること」を掲げている。本稿で述べた廣池の儒教観や「道徳科学」の特質と通じ合う問題意識が、現代の道徳教育においても存在しているということではないだろうか。

参考文献

- 廣池千九郎『道徳科学の論文』（初版 1928 ※本文中の冊・頁番号は社会教育用『新版 道徳科学の論文』による）
- 加地伸行訳註『孝経』（講談社学術文庫 2007）
- 加地伸行『儒教とは何か』（中公新書 1990。増補版 2015）
- 加地伸行『沈黙の宗教——儒教』（筑摩書房 1994。ちくま学芸文庫版 2011）
- 杜維明「21 世紀の儒学」（土田健次郎編『21 世紀に儒教を問う』早稲田大学出版部 2010）
- ロッドネイ・L・タイラー「儒教の伝統における宗教的特質」（奥崎裕司・石漢椿編『宗教としての儒教』汲古書院 2011）所収